

論文の和文要旨

論文題目

タンザニア、ダルエスサラームにおける
スワヒリ歌謡、ターラブの誕生と変容

氏名

檜垣 まり

本稿は、スワヒリ歌謡ターラブの誕生と発展の過程を、タンザニアの首座都市ダルエスサラームの事例を元に、通時的、共時的な視点から検証するものである。

ターラブは、近代アラブ音楽の影響を受けて、東アフリカにおいて発展した歌謡ジャンルである。20世紀初頭には、聴衆は東アフリカ沿岸都市部に限られていたが、現在はケニア、タンザニア、ブルンジ、コモロ諸島、アラブ首長国連邦、イギリスと東アフリカ内陸部やスワヒリ語話者の移住地域にも広まっている。これまでの研究ではターラブ概念は自明のものとされてきた。しかしそれは、歴史的、地域的に俯瞰したとき非常に曖昧で、その定義にはゆらぎがみられ、民族や時代によって異なったバリエーションが見られる。本稿ではターラブという言葉が使われるようになってから約1世紀に渡るターラブ概念の変転を、社会変化と共に明らかにする。特に、これまであまり着目されることのなかったターラブ・クラブの諸活動に着目し、結成されてから今日に至るまでの活動状況と、興行形態、ターラブの歌詞、音楽（楽器編成・リズム）、歌われる場の歴史の変容過程についても詳細に記述する。

序章では、本論文の目的について述べる。本研究は、ターラブの誕生と変容過程について詳述したポピュラー音楽研究としての意義と、その舞台となった新興スワヒリ都市に関する人類学的研究としての接点に貢献を見出すことができる。また、ターラブに関する先行研究から、明らかになったことや論点を整理し、特にクラブとターラブの歴史と変遷過程については、具体的な研究は存在していないことを指摘した。

第1章では、スワヒリ社会の形成とダルエスサラームの位置づけについて文献研究を行った。東アフリカ沿岸地域は古くからペルシアやアラブ、東南アジア、中国に至る諸外国とインド洋交易を行い、東アフリカのバントゥー系諸民族との混交文化を発展させ、沿岸部にはその拠点として、15世紀までに交易都市が繁栄を誇った。その頃までに、東アフリカ内陸部とは異なる、諸外国の影響を受けた独自の音文化を形成していたことが明らかになっている。その後、ポルトガル、オマーンの支配を受け、オマーンがザンジバル島に王都を築き、東アフリカ沿岸地域一帯を手中に入れて、コンゴ（旧ザイル）に至る交易ルートを敷いて作り上げた政治、経済ネットワークが、ターラブ誕生と発展の基盤となった。ダルエスサラームはザンジバル島のオマーン王が建都し、ドイツ植民地支配の拠点として整備されたことにより都市化が進んだ新興都市である。すでに都市社会が形成されていた他の旧交易スワヒリ都市とは異なり、多くの移民間交流の中から、それぞれの持ち寄った文化を融合させて独自の都市文化揺籃の地となった。

第2章では、スワヒリ音文化の形成について記述した。その際、第一に、ターラブ以前の音文

化、第二に、ターラブと同時代に共存している諸ジャンルについて、そして、第三に、音文化が社会に占める位置について、社交クラブとしての機能を特色として指摘した。

第3章では、ダルエスサラームにおけるターラブ・クラブ結成に直接的な影響を与えた19世紀末から20世紀初頭のザンジバル島のターラブの発展に関して、文献研究を行った。ターラブはザンジバル島において、宮廷音楽として盛んになったものが民間にも広がり、大陸部へも波及していった。当初アラビア語で歌われていたターラブはスワヒリ語でも歌われるようになり、また、奴隷出自の女性歌手シティ・ビンティ・サアドがコロンビア・レコードからアルバムを出したことにより、女性を含めたターラブ・ファンが東アフリカに急増したのである。

第4章では、植民地期1930年代～1960年代のダルエスサラームにおいて、二大ターラブ・クラブが男女別に結成され、人気を獲得し、サッカー・クラブなど地域コミュニティと深く関わりあいながら発展していく過程について述べた。多くのクラブは、後の初代大統領ニエレレに協力して独立運動を成功へと導く一翼を担った。また、ターラブ・クラブではないが、インド映画の流行に影響を受けて結成された幾つかの芸能集団の存在について触れ、後にターラブや別の踊りのクラブへと移行していくことを指摘した。

第5章では、タンザニア連合共和国として独立後、社会主義体制下とその崩壊後のターラブ・クラブについて述べた。1970年代に入ると、北部港湾都市タンガ・スタイルのターラブが流行し始め、ダルエスサラームのターラブ・クラブも流行を取り入れていった。また、国の行事や式典、来賓の際での演奏機会が増え、1970年代後半から1980年代にかけて、政府は伝統芸能(ngoma)、サーカス、寸劇、合唱、ターラブといった総合的な芸能集団の編成に乗り出す。ターラブ・クラブは肥大化し、分裂したり、公営バンドに吸収されていくクラブも続出した。1980年代後半から1990年代にかけては、経済自由化の流れを受け、タンガ・スタイルのターラブをベースとして、ドラムセットやシンセサイザーなどの新しい楽器を取り入れ、辛辣な歌詞を特色とするモダン・ターラブを自称するものが急増し、商業化が進行した。音楽活動をしないメンバーも大勢含まれていた社交場としてのクラブは下火となり、金銭を得る音楽活動のためのバンドが急増しているが、ミュージシャンたちの中にはクラブの人間関係はそのまま保っている者も多い。

第6、7章では、様々なターラブの現場に着目した。第6章では、植民地期活動の中心となったクラブとバー、政党の宣伝や選挙などの政治的な場、商品の宣伝、そしてコンサートと、それぞれの場について検討した。また、レコードに始まり、ラジオ、カセット、テレビ、CD、ビデオ、ビデオCDに至るまで、マスメディアによって配信されるターラブ各々に着目して述べた。ターラブ発展の主な場となった結婚式では、ターラブに限らず様々なジャンルの音楽が演奏される。したがって、結婚式に関しては第7章として章を別にもうけ、昔と現在のダルエスサラームにおける多様な結婚式の様式からプログラムに至るまでまとめ、結婚式を盛り上げる音の選択に関する考察を行った。現在ターラブのファンは、主に沿岸地域出身の年配者が好む「昔風のターラブ」とか「起源ターラブ」と呼ばれるものと、内陸部出身のキリスト教徒でも好む「モダン・ターラブ」とに二極化している。また、同じモダン・ターラブであっても、マスメディアにのらない曲は流行らず、テレビやラジオで流される曲に人気が集まる傾向がある。従って、植民地

期から主にイスラーム教徒の結婚式で依頼されて演奏を行ってきたターラブ・クラブは、依頼主と聴衆の好みに合わせて、オリジナルのターラブと、流行中の他のバンドのコピーと両方を用意しておくことで対応しているのである。

ターラブの歌詞は、時代と場に応じて、その変化と特色を時代背景と共に理解できるように、各章に盛り込んで提示した。ターラブの歌詞は、伝統的なスワヒリの叙情詩の流れを汲み、音節数や押韻などの規則が決まっていて、それにのっとなって作詞される。近年では原則に乗らない自由詩も多く使われるようになった。内容は、作詞家が自分自身で作詞することもあるが、人からテーマや出来事を聞き、依頼されてそれを詩にする場合もある。特に、昔はコミュニティーの音楽として共通の価値観や出来事、教訓、時事などが歌にされることも多く、ある特定の人物に対するメッセージ（ujumbe）がこめられている場合も少なくなかった。それがあからさまにわからず、意味を様々に解釈できるように隠喩（mafumbo）が使用されることも多かったのである。しかし、近年、不特定多数の都市民の間の歌謡となったターラブの歌詞には、誰でもわかる平易なスワヒリ語が使われ、流行にのっとなって、他人を侮辱する言葉（mipasho）が多用されるようになっている。

終章では、ターラブとは何かという主題を、ダルエスサラームの事例から明らかになった事実を総合的に検証し、スワヒリ社会の特性に関する考察に広げながら、まとめとした。

また、資料として、ターラブ女性歌手のライフ・ヒストリーを描くことで、1人の女性の人生にターラブとダルエスサラームの都市社会の変遷がどのように現れるか、また、女性にとってターラブとはどのような意味を持つ音楽であったのか考察する一助とした。

ターラブは、新しい社会変化に対応した人々のネットワーク形成と共に誕生し、そのネットワークの拡大とグローバル化に対応していく中で変容していった。ターラブ定義の曖昧性とゆらぎは、スワヒリ概念の曖昧性であり、ターラブ概念とその変転を明らかにすることを通して、本研究は音文化の視点から、拡大を続けるスワヒリ社会の特性について解明することにつながった。